東方永証録

ちょもより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方永証録

【Ｎコード】
Ｎ８２９６Ｙ

【作者名】
ちょもより

【あらすじ】
事故って、幻想郷が出来る前の世界に行った高２の落合透弥はとてつもない能力を持っている。
さまざまな、人間・妖・妖精と出会い、様々な事件や事故＋異変！？に干渉することになる。
透弥はどうなってしまうのか？ハラハラドキドキの冒険ファンタジー！！

じゃないです。ごめんなさい。

幻想入り（前書き）

キャラ崩壊・原作と違う・主人公がチート
と、いったものが不快な方は、あまり閲覧をオススメしません

幻想入り

それは、告る⇒断られる⇒落ち込む⇒憂鬱

という、４コンボを叩き込まれた１週間後の事だった。

→をまだ引きずった今の俺、落合透弥は高校２年生で特にいいところもなく成績は上の中程度だが、スポーツは下の中といったところ。

後、１つ言うなら動体視力がおかしいこと、おかしいと言っても常人の２０倍以上はあるぐらいでそれに体が追いついてこないぐらいの力しかない。

まあ、俺の個人情報なんてどうでもいい。

結論から言おう。

事故りそうｗｗｗ

と、言っても今その真っ最中で軽く鬱状態の俺は信号無視したからね・・・

右から迫るトラックに気づかず、やっと分かったのは、トラックを俺の距離が３ｍぐらいになった時。

だが、トラックはスローモーションに見える。けど体もスローモー

ション。

無我夢中で、手をトラックの方に出した。

それで、止まるはずはない。

分かってはいるが、人間の本能は自分の命を自分の体を犠牲にしようとしている。

ドゴッ、と、いう鈍い音が響く。

後ろへかなり吹き飛ばされた事だけ分かって、そこで世界は暗くなった。

「・・・・・から、頑張ってね？」

誰だ？と、体を起こしてみようとする。
「いっっ！」
体が悲鳴を上げているのが分かる。
しばらくして、ようやく体に自由が戻ってきた。
周りを見渡すと一面の草原だった・・・
「え！？、ちょ、ここどこ？」
冷静になれ、冷静になれ、と繰り返す。
俺はさっき、事故って吹き飛ばされて・・・・・・ああ、後ろから誰かの声が聞こえて気づいたらここだったのか・・・
神様ぁ？え、お、俺、別にこんな事望んでないよー！！？、いや、普通に一般人の生活で良かったんだけど。
嘆いても、仕方がないので、とりあえず周りに何かないか探してみる。
この時、迂闊に動かなきゃ良かったと、後悔した。

幻想入り（後書き）

どうでしょうか？
初投稿です。
初とか気にしなくていいし厳しいのでも構いません。
意見・要望など、どんどん教えてください。

俺って能力持ち？（前書き）

更新遅れてすいません
言い訳ができるような身分ではないので黙々と巻き返しを図って行きたいと思います。

と、言う訳で、今回は透弥の能力がね……

俺って能力持ち？

誰かいませんかー、と叫び続けて、もう４時間ぐらい経っただろうか？

もう足はもつれて、喉も叫び過ぎで炎症が起きていることだろう。

だが、この作業をやめる訳にはいかない。

なぜなら、この行為が今、唯一の安全を確保することに繋がることだからだ。

「誰か……いません…ゴホッ…居ませんか……？」

頭では、分かっている。

ここは辺り一面の小麦畑となっている。

つまり、ここ一帯は農家とかの広大な土地で、手入れを細かくやるような広さではない。

まあ、あまり人が来ない、ということだろう。

「ＨＡＨＡＨＡ……もう駄目みたいだ……」

そこで、世界はブラックアウトした。

はいぃーーー、起きた〜！

が…

もう、どうしようもありません。

短い人生でした。……悔いは……めっちゃあるんだけど！！！

簡潔に説明しよう。

私こと、落合透弥は、命の危険にさらされているのだ……

目の前には蜘蛛が居る。と言っても、ただの蜘蛛ではない。

俺は身長が１７８ｃｍあるのだが、この俺の３倍はあろうかと言う大きな大きな蜘蛛。

あと分かることは、もう、この今いる世界が今まで俺がいた世界ではないこと……

なんと言うか……妖気、とでも言おうか、蜘蛛から出ているその気配、いや、空気が違う。

ただ、その場に居るだけで息苦しい、そんな空気で満たされている。

「マジかよ……」

もう、蜘蛛はすぐそこまで迫って来ている。

蜘蛛の腕には大きな鎌が付いている。その鎌を大きく振り上げて近づいてくる。

死ぬのか？こんなところで？

……だいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダ…

それしか考えられなかった。

蜘蛛はゆっくりと、狩りを楽しむかのように近づいてくる。

蜘蛛の大きな鎌が降り下ろされる

目をつぶって、死を覚悟したその時だった

バチィィィ、と破裂音が鳴り響く

いつまで経っても何も起きない事を不自然に思っておそるおそる目を開けてみる。

すると、鎌が無い蜘蛛の後ろ姿が遠ざかって行った。

「助かった……のか？」

ええ、はい、助かりました。

緊張が溶けて、腹が減って来たよ。

まあ、そのあと、食べられそうな木の実があったんで助かったが…

俺って能力持ち？（後書き）

いや～、難しい。うん、難しい。

あと、作者は東方をやっていますが、公式設定？なにそれ？食べられるの？

と、いう人間ですので、多少の事は脳内補完でお願いします

ご意見、指摘、お待ちしております！

やったぜ！集落発見だＺＥ！（前書き）

やっと透弥が暮らせます
きたのはいいんですが展開を迷っています

どーしよーかなー、こーしよーかなー…
すいませんふざけました。

あと、話に現世が絡んできます。
現世は今後の布石なので…

やったぜ！集落発見だＺＥ！

あの蜘蛛を撃退してから、どんどん良い事が続く。

まず、かなり美味い木の実を見つけた。次にかなりの清流があって、水も確保出来た。今度は、木に刺さっている剣を見つけた。すると、狩りが出来るようになった。火も起こせるようになった。

けど、気づくと、もうこっちに来てから3日経ってしまった。

今は春休みで、2年生とは言っているが、まだ1年だ。

いや、1年の修了証書？みたいなやつ貰ったから、2年生だい！べ、別に後輩が楽しみな訳じゃ無いんだからねっ！

しかし、春休みはあと、約1ヶ月だ。その間に戻らなくては…

一昨日捕まえた鹿の干肉にかぶりつく

普通は1日じゃ出来ない？うん、そうですね。でも、なんか「時が早くなればなぁ」なんて考えたら、なっちゃったんだよ。

もしかして、俺ってなんかの能力あるのかな？

一応、簡単な寝る所は作ったし、生活できるのだが…これって、縄文時代並みの生活だな！オイ！

ちなみに俺の一日スケジュールがこんな感じ

６：００　起床

～６：３０　朝飯

～１１：００　誰か居ないか～

～１２：３０　狩りでもしますか

～１３：００　昼飯だＺ☆Ｅ！

～１５：００　収穫を保存食ＴＹＰＥにする

～１６：００　剣術なんかやっちゃおっと

～１８：１５　火起こしするだお

～１９：００　晩飯

～２０：００　たいまつ、弓、矢を作る

寝る（ー＿ー）。ｚｚｚ……

……うん、縄文時代だね……

「なんだか、悲しくなって来たよ」

だんだんと日は昇ってきて、かなり明るくなってきたので…

「おしっ、今日は頑張ってみますか。」

腰を上げて、剣を腰に通して、弓を矢受けを背中にかける。また、動物の皮で作った袋に、干肉やドライフルーツを詰める。

なんで、肉や果物を持ってくかって？

そりゃ、……村が見つかった時に有利になるためだ。

昨日は家、というか、小屋を作るのに精一杯だったが、今日は活動範囲を広げてみる。

活動範囲といっても、家から煙を上げて、それが見える範囲だけど…

〜〜青年探索中〜〜

「マジか……、でも、一応村は見つかったよな……」

なんとなく安心する

だが、考えていた、最悪の状況にもなった。

透弥が見据えているその村。それは、誰でも学校で習った事のあるだろう縄文時代の暮らし。そのものなのだ。

「なんとなく、分かってたけど……、これは」

さようなら平成、俺の日常。こんにちは縄文時代、狩りの暮らし

その村の守りが固い。と、言ってもかなりの大きさの村でその周りを囲うようにして木で壁を作っている。

さらには、入口らしい所に門番が４人ほど立っている。

かくして、村に近づくとあからさまに敵意を向けられている。

「ふう、こりゃどうなるか…」

ビビっては負けだ。だが、旅人を装って入る事にしたので、それっぽい言い訳と、弱い物腰で行くことにした。

「おい、貴様。ここに何の用だ。」

声に重いドスを利かせて１人のリーダー格っぽい人が出てきた。

「いえ、怪しい者ではございません。旅の者です」

「名を名乗れ」

「はい、落合透弥、と申します」

「ふむ。では、改めて何の用だ。落合透弥よ」

「自分の村は余り栄えてなくて、老婦人に苦渋の生活を強いれてしまっているのです」

「ですから、旅をして負担をかけない生活の方法を探しているのです」

「なるほど」

リーダー格の男は納得したのだろう。腕を前で組んで、ふむ、と言っている。

「で、ずうずうしいのを承知でお願いしますが……」

ここで、少し焦らす……

「なんだ、早く申してみい」

キタ――――（゜∀゜）――――！！……やはり、やはりなぁ！俺って結構、人扱うの得意かも

「では……、どうか、この私を少しでいいのでこの村に泊めていただけないでしょうか？」

そこで、後ろの兵がこそこそと話をしているのが目についた

「あれは、妖怪じゃないのか？」

「服も変わっているしなぁ」

「最近は妖怪も多いし、どうだかなぁ」

……ああ、なるほど。だからこんなに守りが固いのか。

まあ、とっておきを使うけどね。

「もちろんタダでなんて申しません。まずはこれをどうぞ」

と、いって腰に下げてある干肉を少し手渡した。

「なんだこれは？」

まあ、そりゃそうだよね。干肉なんて、まだできないだろうし…

「鹿の干肉です」

「「「「干肉？」」」」

「はい、肉を長くとって置けるようにしたものです」

カリッ！

「むう、なかなか美味いな」

「この技術は、自分の親父が作ったもので、これを村で出来るのは……もう自分だけです」

「！・・・・・・・・」

「そう、か。そうなのか、いや、疑ったりしてすまなかった。」

「いえ、で、泊めて頂ければ、この技術をお教えします」

「！！、そうかそうか、だが、まずは村長に話を付けなくては……」

「お願いします」

♪～、透弥は交渉権を手に入れた

頭の中で奇妙なナレーションが聞こえたのは気のせい…

やったぜ！集落発見だＺＥ！（後書き）

まあ、そろそろ東方キャラ絡みを出そう、と思います。

意見、感想お待ちしています

氷精様？いや、そんなバカな…（前書き）

やったぜ～、やっと東方絡みを出せそうせです。

おまたせしてすいません。

やっと、学校が冬休みに入りましたので、一気に３０ぐらい投稿していきたいと思います

氷精様？いや、そんなバカな…

まあ、なんと言おうか。空気が重い。

先日、遭遇した妖怪？なのか。と、似た空気を纏っている。それが、この村の村長。

空気は、なんか澄んでいて洗練された感じがする。

一発で分かる。この人は何か術的なものを使える。

しかも、かなり強い……

「顔を上げて下さい。落合透弥よ。」

女性？聞いた感じは女声だった。

「は、はい」

言われた通りに顔を上げる。

そこには、女性の顔が間近にあった。

え？気配も何もなかった。

「ッ！」

「あらあら、そんな驚かなくてもいいじゃない」

……

「あ、は、はい。申し訳ございません」

「そんなに固くならなくていいわよ～」

なんだか、おっとりとした人。それでいて、美しい。

素直にそう思った。

「それにしても、あなたって面白いわ～、だって、＜能力＞あるんでしょ？」

「の、能力？」

「あら、分からない？」

「え、ええ」

「まあ、簡単に言えば、たまに出る特殊な力のことよ」

「俺が？」

あ、俺って言っちゃった。

「俺？……いいわ！それ！」

……は？

「今度から、一人称は俺にして、っていってるの！」

ああ、そういうことですか。変な所にツボがあるなこの人。

「わかりました。で、俺の能力ってなんですか？」

「うーん、分からないわ～。あ、ちなみに私は＞人の感情を操る程度の能力＜よ」

「でも、あなたには効かないみたいね～」

え？なんで？もしかして俺の能力って、防御系？

「まあ、いいわ。泊めて上げる」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

これ以上は無いと言うぐらいの土下座をする

「……そんなにかしこまらなくていいわよ」

「でも、短期間とはいえ、この村いに住むんだから、氷精様に挨拶位はしときなさ～い」

氷精……？

いや、東方じゃないし、そんなのがあるわけ…

はい、居ました。

氷精様です。俺が想像しているのとほとんど変わらないやつが

村人に連れて行かれた先は、森だった。

しばらく進むと、急に開けてきて目の前に大きな湖が現れた。

そこは霧が霧散していて、視界が余り良くない環境だった。

「ここに氷精様が？」

「はい、私たちの村はこの氷精様の加護があるので弱い妖怪は、立ち寄れないんですよ」

なるほど、村から強い気が２つ出ていたが片方は氷精様か…

村人が氷精様を呼ぶ

「氷精様～、旅人が挨拶に参りましたよ～」

「はいは～い、あたいに何の用かな？」

……え？

チ、チルノ？と、東方？

いや、そんな訳が……

分かった。ここは東方世界なのだ。だから先ほどの村長も＜～程度の能力＞とか言ってたし。

だけど、それはチルノではなかった。

「氷精様、初めまして。旅人の落合透弥と申します」

「ふ～ん、面白そうな人間じゃん」

この精霊は、チルノでは無い。

精霊だが、精霊でもない。

なんというか、神気が出ている。

多分、信仰を得て神格化したのだろう。

「この度は、お世話になります」

「いやいや～、あたいが世話するわけじゃないけど……」

「これはどうかなっ！」

そこには、数十本の氷の槍があった。

ヒュン！と、風を切る音が聞こえる。

シュッ……

「やっぱり、あんた能力持ちなんだ。」

「みたいですね……」

「相当強い能力だね〜。あたいの氷槍が跡形もなく消えちゃった。」

ああ、この?、バカじゃない。

「失礼ですが、名は?」

「ん?ああ、あたいの名前はチルナ。チルナ・フローズ」

フローズ?まあ、チルノは?だから分からないか……

でも、チルナって…

なんか、そのまんまだな。

水色の髪に、青と白のワンピース?なのか?。さらには後ろに氷の羽まで付いてる。

チルノと違う点と言えば、少し大人びた顔と、セミロングの髪ぐらいか。

チルノの先祖なのかな？

「まあ、これからよろしくお願いします。氷精様」

「う～ん、その『氷精様』っていうのやめてくれない？」

「じゃ、フローズ様にしま「敬語も止めて？」……はい」

「あ～、あとね～、フローズって言うのも駄目」

無邪気な笑顔で語った。

「村の皆はね～、全員いい人ばっかりなんだけど、～様だけは嫌なんだよね～」

「どうして？」

「それだよ。皆、あたいの事を目上に見てるのが嫌なの。もっと友達とかが欲しいなあ、って思ってさあ。そういう風に友達みたいに話せるのが欲しかった。」

「ん～、でも透弥は違うみたいだね」

「まあ、チルナがそう言うなら」

「ああ～、最ッ高！もっと遊び来てよ。待ってるから。」

「了〜解。またな〜」

俺は後ろに居るチルナに手を振って答えた。

なんか、神様とのパイプが出来てしまった。

この出会いが無かったら、今語っている俺はないだろう

氷精様？いや、そんなバカな…（後書き）

う～ん、考えた末のチルナ登場
まあ、チルノの母親か、祖母、曾祖母ぐらいにしたいです。

次回からは、能力の特訓や、弾幕。気力・霊力・魔力の使い方に付いて、チルナが手取り足取り教えてくれます。

感想・意見お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8296y/

東方永証録

2011年12月24日10時51分発行